

Special Essay

随筆「地球とヒトへの想い」

麻酔学 加納 龍彦

平成16年末のNHKテレビ番組「地球大進化」に見入っていたら、スマトラ沖大地震発生のニュースが流れた。ヒトは地球環境の変化に適合するように進化を成し遂げてきた、同時に地球は生き物、との認識を新たにした。

地球は衝突、合体を繰り返し46億年前に強力な引力を持つ大きな惑星に成長、その大きさと引力によって海を維持し、生物の誕生を育んだとのことであった。ヒトを含む生物の祖先は海中バクテリアとのこと。2億5000年前には哺乳類に近いと言われる爬虫類が地下のマグマが吹き出しで絶滅、6000万年前には地球表面の生き物が隕石の衝突に伴う熱波でほぼ全て絶滅した。我々ヒトの遺伝子は、その後の氷河期を含めその間を生き延び進化を成し遂げてきたのであり、共に歩んできた地球環境変化への畏敬の念を改めて抱いた。

遺伝子の突然変異を契機に、環境に順応し易い生物に進化してきた。ヒトが他を抜いて進化し文明を築いたのは、遺伝子の変化以上に言語能力、即ち文化の継承能力に負うところが大きいそうである。今日の情報化社会への急速な傾斜では一部の先進的頭脳は先に走るが、一般市民の共通認識はなかなかついていけない。そんなに急いで一体どこに行くつもりだと悲鳴を上げている。1500g程度の脳では変化する環境、複雑な情報社会に順応できず、学習、進化が追い付かず、脳機能に破たんを生じることが危惧される。

食物を確保した部族、民族は、次に衣類、住居を確保する。必要な物を他の部族、民族から略奪することも行われてきた。しかし、ヒトは幸か不幸か心を持ってしまった。心の幸せが究極の目的であり、心の安楽、安寧は欠かせない。物質がいかに充足しても、心の幸せなくしては満足感が得られないのでは、と想像に難くない。

慢性痛の治療に携わっていて、この患者さんの痛みはヒトが心をもった代償ではないかと、ふと思う。仮に、心を持たない方向にヒトが進化もしくは退化した未来では、慢性痛はなくなるのではないか。慢性痛では痛みの中樞の可塑性に負うところが大きい、僅か5~10年の治療期間にそれを整復するのは難しい。

先日、「ゆりかもめ号」で東京お台場に向かった時、ここで生まれ育ったヒトと田舎で生まれ育ったヒトの考え方が違って決して不思議でないと思った。存在するものを全て容認し、共存を模索するのが肝要となる。国内外のヒトの間の理解と平和に言葉や笑顔による交流は欠かせない。